

2019年度 野球規則改正

日本野球規則委員会

(1) 3.01【軟式注】を次のように改める。(下線部を改正)

【軟式注】軟式野球ボールは、外周はゴム製で、M号、J号、D号、H号の4種類がある。M号は一般用、J号、D号は少年用のいずれも中空ボールで、H号は一般用の充填物の入ったボールである。

ボールの標準は次のとおりである。(反発は150センチの高さから大理石板に落として測る。M号、J号の20%圧縮荷重は、ボール直径の20%をつぶしたときの力を測る。)

	直径	重量	反発	20%圧縮荷重
M号	71.5ミリ～72.5ミリ	136.2グラム～139.8グラム	70センチ～90センチ	32キログラム～40キログラム
<u>J号</u>	<u>68.5ミリ～69.5ミリ</u>	<u>127.2グラム～130.8グラム</u>	<u>60センチ～80センチ</u>	<u>27キログラム～37キログラム</u>

(以下略)

【解説：軟式使用球の改正】

軟式野球の使用球が昨年までのB号、C号に代わって新たにJ号が採用されたことによる改正です。使用球は4種類となり、M号は中学生以上、J号は小学5、6年生、D号は小学4年生までの試合でそれぞれ使用します。またH号は一般用で、いわゆる準硬式と言われるものです。

(2) 4.08 (c) および同【注】を次のように改める。(下線部を改正)

(c) ダブルヘッダーの第2試合は、第1試合の終了30分後に開始する。ただし、この2試合の間にこれ以上の時間(45分を超えないこと)を必要とするときは、第1試合終了時に、球審はその旨を宣告して相手チームの監督に通告しなければならない。

【注】両チーム監督の同意を得れば、ダブルヘッダーの第2試合を、第1試合の終了後30分以内に開始してもさしつかえない。

【解説：ダブルヘッダーの試合開始時間に関する改正】

ダブルヘッダーとは、同一チームが2試合続けてすることを言います。近年、我が国のプロ野球でダブルヘッダーが行われることはほとんどなくなりましたし、アマチュアのトーナメントやリーグ戦でのダブルヘッダーも行われることはまずありません。第2試合の開始が20分後から30分後に、また最長30分後が45分後に変更されましたが、この改正による我が国への影響はないと考えられます。

(3) 5.07 (b) を次のように改める。(下線部を改正、取り消し線部を削除)

投手は各回のはじめに登板する際、あるいは他の投手を救援する際には、捕手を相手に ~~8 球を超えない~~ 準備投球をすることは許される。この間プレイは停止される。

各リーグは、その独自の判断で、準備投球の数や時間を制限してもさしつかえない。~~このような準備投球は、いずれの場合も1分間を超えてはならない。~~ (以下略)

【解説：各回のはじめの投手の準備投球についての改正】

投手が各回のはじめにマウンドに上がって行う準備投球について、昨年までの規則で定められていた球数 (8 球以内) および時間 (1 分以内) とともに制限がなくなりました。

ただし、各リーグで準備投球の数や時間を制限することは許されますので、我が国では各団体で取り決めればよいことになります。したがって、プロ野球や高校野球、軟式野球では昨年までの取り決めをそのまま適用しますが、社会人野球と大学野球においては、この改正を受けて規則通り運用することとします。つまり、投手は準備ができるまで制限なしで準備投球をしてもよいことになります。社会人野球と大学野球の一部のリーグでは、昨年からはベンチ前での投手のキャッチボールを禁止しましたが、この改正に伴い今シーズンからはブルベンでのキャッチボールも禁止します。

投手の準備投球について、国際大会では登板している投手はベンチ前はもとより、ブルベンでのキャッチボールも禁止されている。日本国内でもプロ・アマ問わず取り組んでいくべき課題。

(4) 5.09 (c) (1) **【原注】** 後段を次のように改める。(下線部を追加)

したがって、塁の後方からスタートして、走りながら塁に触れて次塁へ進もうとするいわゆるフライングスタートは、正規なりタッチの方法ではない。このような走者は、アピールがあればアウトとなる。

【解説：タッグアップ時のフライングスタートの取り扱いの改正】

フライングスタートが正規なりタッチでないことは昨年までの規則でも規定されていましたが、そのような行為を行った走者に対して、審判員が自らアウトを宣告できるのか、それともアピールがあって初めてアウトが宣告できるのかについては規定がありませんでした。今回の改正で、通常なりタッチと同様、守備側のアピールがあって初めてアウトが宣告できることが明確になりました。

- (5) 5.10 (ℓ) の項目名を「監督・コーチがマウンドに行ける回数」に改める。

【解説：項目名の変更】

これまでの「マウンドに行く回数」が「監督・コーチがマウンドに行ける回数」と変更になりました。これは、後の (7)5.10(m) 「マウンドに行く回数の制限」が新たに追加されたための措置です。

- (6) **【5.10 ℓ 原注】** 4 段落目の末尾の文を次のように改める。(下線部を改正)
リリース投手は、審判員の適宜な判断において、必要な準備投球が許される。

【解説：準備投球に関する改正】

前記 (3)5.07(b)の準備投球の改正に伴う改正です。[5・07ℓ 原注]に記載されている特殊な場合のリリース投手の準備投球は、昨年までの「8 球またはそれ以上の準備投球が許される」から、「必要な準備投球が許される」と改正されました。

- (7) 5.10 (m) および同 **【注】** を追加する。

(m) マウンドに行く回数の制限

以下の規則は、メジャーリーグで適用される。マイナーリーグでは、1 試合のマウンドに行ける回数について、本項規定と異なる制限を設けてもよいし、制限を設けないこともできる。

- (1) 投手交代を伴わないでマウンドに行くことは、9 イニングにつき 1 チームあたり 6 回に限られる。延長回については、1 イニングにつき 1 回、マウンドに行くことができる。
- (2) 監督またはコーチが投手と話すためにマウンドに行った場合、回数に数える。また、野手が投手と相談するために守備位置を離れた場合や投手が野手と相談するためにマウンドを離れた場合も、位置や時間にかかわらず回数に数える。ただし、次の場合を除く。
 - (A) 打者が打撃を完了して次の打者が打席に入るまでの間、投手と野手がいずれも守備位置から離れずに話し合いが行なわれた場合。
 - (B) 雨天時に野手がスパイクの汚れを払うためにマウンドに行った場合。
 - (C) 投手の負傷、または負傷の可能性があるために、野手がマウンドに行った場合。
 - (D) 攻撃側チームによる選手交代の通告後、野手がマウンドに行った場合。
- (3) サインの確認——1 試合（または延長回）で決められたマウンドに行くことができる回数を使い果たした後に、捕手が出したサインについて投手と意思の確認ができていないと球審が判断した場合には、捕手からの要求があれば球審は捕手に少しだけマウンドに行くことを認め

てもよい。決められた制限回数を使い果たす前にサインの確認のためにマウンドに行った場合は、回数に数える。

【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。

【解説：1試合当たりのマウンドに行く回数を制限する規則の新設】

MLBで新たに設けられたスピードアップに関する規定です。

末尾の [注]の通り、我が国では、各団体が定めているスピードアップルールを適用しますので、この改正規則を適用することはありません。

ただし、現時点では WBSC(世界野球ソフトボール連盟)が、この改正規則についてどのような対応をするのか不明です。WBSC 主催の大会において、今年の大会から採用する可能性もあります。

(8) 6.01 (a) (5) 【原注】を次のように改める。(下線部を改正)

【原注】打者または走者が、アウトになった後、進塁を続けたり、帰塁したり、正規の占有していた塁に戻ろうと試みたりしても、その行為だけでは、野手を惑乱したり、邪魔したり、またはさえぎったものとはみなされない。

【解説：アウトになったばかりの打者または走者の妨害に関する改正】

アウトになったばかりの打者または走者の妨害に関する規則の改正ですが、これまでの解釈に変更はありません。昨年までの文章、「アウトになった後走り続けてもその行為だけでは……」の解釈は、進塁しようとする方向はもちろんのこと、進塁方向とは逆の元の塁に戻ろうとする行為も、それだけでは妨害行為とはみなされないことを明確に説明したものです。

(9) 7.03 (a) (7) 前段を次のように改める。(下線部を改正)

ダブルヘッダーの第2試合の際、第1試合終了後30分以内に、競技場に現われなかった場合。

【解説：フォーフィッテドゲームに関する改正】

前記(2) 4.08(c)のダブルヘッダー第1試合から第2試合までの時間の改正に伴うものです。

(10) 8.02 (b) 【注1】を削除し、【注2】を【注】とする。

【解説：削除】

【注1】「イニングの表または裏が終わったときは、投手および内野手がフェア地域を去るまでにアピールしなければならない」との文言は、5.09(c) アピールプレイの項の本文に記載があるので、本項で重複記載する必要はないので削除しました。

(11) 8.02 (c) の末尾に次の文を追加する。

投球カウントの誤りの訂正は、投手が次の打者へ1球を投じるまで、または、イニングや試合の最終打者の場合には守備側チームのすべての内野手がフェア地域を離れるまでに行なわなければならない。

【解説：投球カウントの訂正に関する改正】

投球カウントの誤りがあり、そのままプレイが続けられた場合の取り扱いについて、これまでは明確な規定がありませんでした。今回の改正によって明確に規定されましたので、具体例で示しておきます。

[例 1] 2 ストライク後の投球を打者が見逃してストライクが宣告されたが、打者はそのまま打者席に居座り、守備側も審判も気づかずプレイが続けられ、打者が次の投球を打ってヒットとなった。

[例 2] 3 ボール後の投球がボールとなったが、打者が一塁に行かずプレイが続行され打者は次の投球を打って凡打となった。

今回の改正により、例1、例2どちらの場合も、当該打者の次の打者に対して投手が1球を投じる前に誤りに気づいて訂正を申し出れば、正しい状態に戻せることになります。訂正を申し出るのは、選手でも審判でも構いません。また公式記録員は9.01 (b) (2) 【注】に定めるように誤りを知らせることができます。

(12) 定義 44 (d) を次のように改める。(下線部を改正)

(d) 観衆の妨害——観衆が競技場内に入ったり、スタンドから乗り出したり、または競技場内に物を投げ込んで、インプレイのボールを守備しようとしている野手の邪魔をした場合に起こる。

【解説：観衆の妨害に関する改正】

観衆の妨害は、競技場内に入ったり、乗り出したりしたときはもちろん、物を投げ込んで野手を邪魔した場合にも起こることが規定されました。

以上で2019年度の改正規則の解説を終わります。5.07 (b) 投手の準備投球についての改正に伴い、社会人と大学では今シーズンからすでに登板している投手は、ベンチ前はもとより、ブルペンでのキャッチボールも禁止されます。

これは国際大会では普通に行われていることであり、日本国内でもプロ・アマ問わず全体で取り組んでいくべき課題です。WBSC 世界ランキング1位の国としての責任においても、ぜひとも克服できるよう関係各位のご理解とご協力をお願いしたいと思います。

以上